相模経済新聞　2022年2月10日号

宇宙生命哲学 ことはじめ 42

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

宇宙旅行フィーバーの危うさ

2021年は、「民間人による宇宙旅行元年」と言っても良いだろう。大手IT企業アマゾン創業者ジェフ・ベゾス氏によるブルーオリジン社の宇宙ピストン旅行、米国の電気自動車会社テスラ創業者イーロン・マスク氏のスペースXによる地球周遊の宇宙旅行、日本の実業家前澤友作氏による国際宇宙ステーション（ISS）での12日間の宇宙滞在も話題になった。

宇宙には、未知への遭遇という計り知れないロマンと期待が溢れているという。私が宇宙で一番経験したいことの一つは、宇宙空間から漆黒の闇に浮かぶ青く輝く丸ごとの地球をみることにより、地球の本当の素晴らしさを知ることであった。その念願の映像は、54年前に、アポロ宇宙船から送られてきて、既に私の脳裏には鮮明に焼き付いている。最近ではJAXAの月探査船「かぐや」からの迫力ある映像も見ることができる。私の願望は、宇宙へ行かなくても、ほぼ達成されている。ISSは、地球の表面を舐めるように飛行している。図に示すように、仮に地球の直径を3センチとすると、ISSはその表面から1ミリのところをすれすれに飛行している。ISSからは、地球のほんの一部が見えるだけである。ベゾス氏の宇宙ピストン旅行は、表面から0・2ミリメートルの距離を飛び上がり12分の飛行ののち、パラシュートで砂漠に帰還している。このピストン旅行の1席が30億円である。帰還した旅行者たちは、一様に満足感を口にしているが、このような飛行でも、地球環境には相当なダメージを与えている。

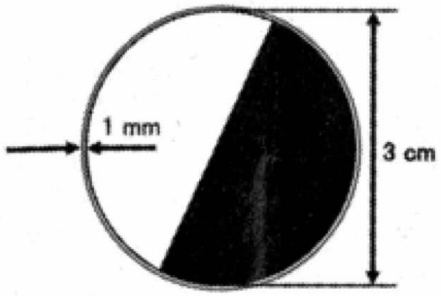

図　地球の直径を3cmとすると、ISSの軌道は　地球表面から1mmの線上にある

我々は、経済効率を最優先にした結果、地球温暖化、異常気象という深刻な環境問題に遭遇している。今、世界は、経済効率最優先の社会から、最後の一人まで見捨てないというSDGs（持続可能な開発目標）の社会へと舵を切っている。

地球上の生命現象は、地球環境の中で循環している時空を超えた高次元巨大環境生命体と考えることができる。地球環境を、如何にして健全に保つかが、人類に課せられた究極の課題である。この深刻な状況の中で、単純に宇宙旅行を楽しんでいて良いのだろうか。「人生とは、素敵な地球人になるための終わりのない練習である」との考えに至った時、私の使命は宇宙ではなく、地球上にあると確信した次第である。

祝 相模経済新聞創刊50周年
サイエンス カフェ コスモス
Science Cafe Cosmos
宇宙生命哲学プラットホーム
活動：科学談話会・講演（随時受注）
科学演示実験（出張有り）
252-0329 相模原市南区北里1-19-2
Tel/Fax：042-778-2753（伊藤俊洋）
E-mail:itoht1201@gmail.com

相模経済新聞　2022年1月1日号掲載